

学校名：川崎市立片平小学校

担当：第6学年

氏名：平野 沙和

1. 今回の研修における目的やねらい

人・物・情報が国境を越えてめまぐるしく行き交う今日、互いの文化や政治、思いを理解し、その上でどのように手を携えていくのかを考えることは重要である。このような中で、子どもたちへの国際理解教育を担う教育現場の役割は大きい。子どもたちに伝えたいこと。それは、「違う国であっても、人と人が心を通わせ、互いを尊重し合う姿勢」をもつことの大切さである。そして、このような姿は、これからの時代においてますます重要になってくる。教師として、まずは自分自身が、他国について理解したいという思いが芽生えてきた。タンザニアに行き、現地の様子を見たり、そこに住む人々とかかわったりする中で感じた思いを、子どもたちに伝えたい。そして、子どもたちの心の中に、「積極的に、外国の人とかかわってみたいな。」「それぞれの国で、特徴や良さがあるのだな。」という思いの種を蒔きたいと考えている。また、開発途上国の抱える課題について正しく理解し、「当事者意識」をもつことができるような機会を作っていきたい。

このことをふまえ、タンザニアの方々が大切にしている文化、日本との共通点を見つけることを目的にしたい。また、タンザニアが、どのような課題を抱え、どのように開発が進められているのかを理解し、授業づくりのヒントとしたい。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

タンザニアと日本の共通点について、視察のところどころで見つけることができた。違いから見えることももちろんあるが、似ている部分や同じ部分を見つけていくことは、その国を理解する上でとても大切だと思った。子どもたちに授業をするときにも、この視点を生かしていきたい。

タンザニアの抱えている課題については、まだ一部分しか見えていないかもしれないが、このことをきっかけに、現状についてもっと詳しく調べてみたいと思った。いくつかの課題が複雑にからみあっているため、何か一つの新しいことを取り入れようとしたときに、他の様々な場面にも影響が出ることをしり、平面的ではなく、構造的に問題をとらえ、解決の手立てを考えていくことの大切さも学ぶことができた。

3. タンザニアから学んだこと

私がタンザニアから学んだことは2つある。1つは「具体的に行動することの大切さ」、そしてもう1つは「目の前にいる人の立場に立って考えること」である。

1つめについて、現状を詳しく知らないまま、自分の考えの主張だけをしていても、本質にせまることはできないと感じた。タンザニアに来る前は、自分の中で作り上げたイメージで、国の開発のために必要なことなどを考えていたが、現地のプロジェクトを視察したり話を聞いたりしてみると、来る前と大きく考え方が変わった自分がいた。「現状をまず知ること」、そしてそのために自分の足で、五感で学ぶことがとても大切である。メディアや本に載っていることだけが真実ではないし、日々時間は流れている。そのことを念頭において、具体的に行動していくことが、自分の考えを深める原点になると感じた。

2つめについては、現地の人々とふれあう中で、自分の気持ちの変化に気づいたことが大きかった。「この国には～」から始まる支援ではなく、「この人には～」から始まる支援について考えることができた。相手の顔が見えると、その人が今どんな支援を必要としているのかがおのずと見えて

くる。他人事や、どこかの遠い国の話で終わりにするのではなく、「当事者意識」をもって考えることができたなら…。もちろん、国レベルで考えていくことが必要な場合もあるが、そこに生活する様々な人の立場や思いにそって支援を考えていくと、本当に必要なことが見えてくるかもしれないと思った。これは、支援のむずかしさを目の当たりにしたからこそ、考えられたことだと思う。支援の在り方について根本的に考える機会となった。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

一番伝えたいことは、海外で起こっていることは、決して遠い話ではなく、自分ともつながっているということである。子どもたちが大人になったときに、様々な世界の問題が出てきていると思う。「自分さえよければ」と視野を狭めるのではなく、世界で起こっていることに主体的に目を向けることができる大人になってほしい。今回の研修を生かして子どもたちに授業をするときに、「その国の立場に立って考える」活動を取り入れていけたらと思っている。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

タンザニアでは、さまざまな課題を抱えながらも、それを一つ一つ乗り越えていこうとする人々の姿を見ることができた。人々の姿を、より身近にかんじたことが、今回の大きな収穫であった。

6. 海外研修での役割（各担当や日直）を振り返っての感想・提案など

それぞれが自分の役割をしっかりとこなしていたように思う。私は会計の担当になった。前年度の先輩方のアドバイスも取り入れながら、集める額などを決めていった。担当が2人だったので、相談しながら、残金などを確認し、見通しを立てていた。しおりを全員分作ってきたメンバーがいて、そのしおりはこの研修中とても重宝した。ぜひ、来年度以降もしおりがあるとよいと思う。（しおりは、かなり大変だと思うので、担当を作るとよいと思う）各訪問先の担当では、隊員が海外にいるということや、メールでのやり取りということがあり、具体的な相談は難しかった。タンザニアでは、突然予定が変わるというのも珍しいことではないようで、余裕をもったプログラムを考えておくことが大切だと思う。担当に任せきりではなく、メンバーそれぞれが臨機応変に動こうとしていたのが、とてもよかったと思う。

7. その他、研修全般を通じての感想・意見など

もし旅行でタンザニアに行っていたとしたら…。きっと、全く違う10日間になったことだろう。一人では得られなかった学びがたくさんあった。メンバーの言葉や気づきがヒントとなり、考えを深めることができた。また、事前の研修で、開発支援について考え、どんな授業ができるのかを学ぶことができたのは大きかった。そして、大切なのは、学んだことを自分の中にしまいこんでおくだけではなく、子どもたちをはじめ、周囲に伝えていくことだと思う。継続した学びになるように、これからも開発教育について考えていきたいと思う。

8. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

①行動に移すことで、出発前の不安を取り除く

「人生の価値観が変わる」といっても過言ではないほど、よい経験をするができる研修である。めったに行くことができない国である分、出発前は色々不安もある。例えば、メンバーの中で話題になったのは、予防接種のこと、持ち物のことなどである。一人で考えて、不安ばかり募らせるよりも、専門家に聞いたり、インターネットで調べたりして情報を得るなど、実際に行動に移していくのがよいと思う。また、環境の変化で体調を崩してしまうのは仕方ないが、自己管理不足で体調を崩すのは、もったいない。遅くとも出発の一週間前からは、体調万全で過ごせるようなスケジュール管理、生活管理をしていきたい。

②とにかくメモを取り、自分の思考やひらめきを記録に残す

この研修は、様々なプログラムがあり、五感で実感することが多い。また、多くの方と出会い話を聞く。その時考えたことや印象に残ったことは、必ずメモを取ろう。その時は「忘れない」と思

っても、忘れてしまうのが人間である。形に残しておくことで、後で考えを整理するとき役に立つ。特に、メンバーのふりかえりでの言葉には、考えを深める上でとても大切なヒントがちりばめられていると思う。同じ物を見た者同士、お互いその光景がどんなふうに見えたのか、そこから何を考えたのかを丁寧に拾っていききたい。

③研修を貫くテーマや目標を自分の心の中にもつこと

9. 各訪問先等の所感

日 時	テーマ	所 感
8月10日(月)	日本からタンザニアまでの移動中および現地到着	時間に余裕をもって集合したので、空港のカフェで過ごしながら決意表明。メンバーの熱い気持ちを聞くことができ、改めてこの場所にいられることに感謝したいという気持ちになった。期待に胸を膨らませ、いざ出発！わくわくする気もちが強く、長い飛行時間でもあまり疲れを感じることなく過ごすことができた。空港では、JICAの現地スタッフ、ナシブが温かく迎えてくれた。また、ホテルの前で、今回の研修に同行していただく足立さんが温かく迎えてくださった。
8月10日(月)	JICAタンザニア事務所表敬研修ブリーフィング	長瀬所長の「日本とタンザニアの生きた架け橋になってほしい」という言葉が印象的だった。私たちがタンザニアで感じたことを、日本の子どもたちにも感じてほしいという思いが高まった。また、JICAタンザニアで働くスタッフのことを、「アンテナの感度がよく、常に何ができるか、何を吸収できるかを考えている」とおっしゃっており、私もそのような姿勢でこの研修に臨みたいと感じた。阿部所員が、安全対策のブリーフィングとして、現地で身を守るためのさまざまな対策についてお話してくださった。日本にいる時と同じ感覚ではなく、タンザニアの実情に合わせた過ごし方をし、メンバー全員が安全第一で研修を終えられるようにしたいと強く思った。
8月10日(月)	JICA所員との懇親会	初日ということもあり、始めは緊張していたが、所員の方々の気さくな笑顔ですぐに緊張がほぐれた。ダルエスサラームの普段の様子や、所員の方の仕事について聞くことができ、町のイメージなどが少し広がった。初めて食べたタンザニアでの料理は、とてもおいしかった。私たちがたくさん食べている様子を見て、「長い移動時間だったのに、とても元気ですね。」と所員の方々が驚いていた。
8月10日(月)	本日のふりかえり	ダルエスサラームの栄えている様子に、カルチ

		<p>ヤーショックを受けたという感想が多かった。車、舗装された道路、スマートフォンの看板、高いビル。どれも、イメージしていた「アフリカ」とはかけ離れたものだった。</p>
8月11日(火)	JICA タンザニア事務所 研修ブリーフィング	<p>まずは、天津次長から JICA のタンザニア支援の概要について話を聞いた。各ドナーからの支援の仕方が変わってきたという。今までは、それぞれのドナーが別々で支援をしていたが、うまく機能しなかったため、タンザニア政府に資金を渡し、政府が順位を決めてそれを振り分けていく方法になった。また、JICA の仕事は、現地の雇用を生むことではなく、町の混乱などを解消するなどの側面があることをした。目の前にいる人への直接的な支援だけでは、根本的な問題は解決しない。支援の奥深さ、難しさを感じた。</p> <p>その後、農業・教育・電力の3つのセクターの説明があった。その中で、特に印象に残ったのは安保調整員の教育セクターの話で、就学率は高いが、卒業率は50%程度ということである。そこには、金銭的な問題、親の教育に対する意識の問題、国家試験で合格しないと上に上がれないというシステムの問題などが複雑にからみあっている。早く学校にいて、現場の様子を自分の目で確かめてみたいと思った。</p>
8月11日(火)	本日のふりかえり	<p>支援の在り方について考えた。支援を要請する側とそれを受け入れる側のかかわりが大切であることや、それぞれの国で発展の仕方が違うため、自国のやり方を押し付けるのではなく、その国にあった方法を見つけていくことが、継続的な発展に結びついていくのだと思った。ライフラインなどは、まだ十分とはいえないが、それぞれのセクターの話を聞く中で、現場で働く人々の精一杯のがんばりが伝わり、より身近に感じる事ができた。</p>
8月12日(水)	キリマンジャロへ移動	<p>国内線は、国際線に比べ、荷物の重さの制限が厳しくなるということで、少しどきどきしていたが、無事に全員が通過することができた。キリマンジャロの空港に着くと、涼しくさわやかな気候で驚いた。</p>
8月12日(水)	キリング中等学校 赤木隊員活動視察	<p>赤木隊員の数学の授業を見せていただいた。教室に入ると、子どもたちが大きな声で挨拶してくれて嬉しかった。ある女の子の隣に座らせてもらい、一緒に授業を受けた。集中して、一生懸命問</p>

		<p>題を解いている姿は、日本の子どもたちと何ら変わらない。分からないところを聞いてくれたり、授業後に話をしてくれたりして、かかわることができたのが嬉しかった。</p> <p>中学校チームが用意してきた「幸せアンケート」では、「教育」を選ぶ子が多かった。結果は、日本の子どもたちと大きく違っていた。このことは、何を意味するのだろうか。</p> <p>最後は、私たちからソーラン節をプレゼント。すると、子どもたちもダンスを披露してくれて、とても楽しい時間になった。初めのシャイな様子はどこかへ吹き飛んで、とびきりの笑顔を見せてくれたことが嬉しかった。</p>
8月12日(水)	モシへ移動	<p>車内から見た風景は、大都市であるダルエスサラームとは違い、穏やかな田園風景が広がっていた。太陽の光を受けて、金色に輝くメイズ畑、のんびり道を歩く家畜のヤギやロバたち、頭に荷物を載せて歩く人々。日本の田舎を思い出させるような、のんびりとした光景だった。途中で寄ったカフェでは、やぎのスープに挑戦。だしがよく出たコクのあるまろやかなスープに、皆で大絶賛。</p>
8月12日(水)	隊員との懇談会	<p>江波戸隊員に、現地のレストランバーに連れて行っていただいた。一緒に来ていた平川隊員とも話をすることができ、タンザニアの柔道選手たちのために日々奮闘している様子が伝わってきた。</p>
8月12日(水)	本日のふりかえり	<p>中等学校で感じたのは、教育の目指す方向が、子どもたちの発想や考えを狭めてしまっているかもしれないということ、そして、この現状は日本にも共通の課題があるということである。試験や成績を重要視するあまり、子どもたちにとっての勉強が○か×という基準になってしまっているのではないだろうか。日本は、課題はあるものの、「生きる力」を柱に、コミュニケーションや言語活動を多く取り入れることで、「主体的に課題を解決できる子」を目指すなど、変わってきている。タンザニアの教育は、今後どのような道を辿っていくのかという興味がわいた。</p>
8月13日(木)	カラंगा小学校 植松隊員活動視察	<p>植松隊員の案内のもと、小学校を見て回った。自分の教え子たちと同じぐらいの年齢ということもあり、とても楽しみにしていた。子どもたちは、目が合うと手をふってくれて、フレンドリーに近寄ってきてくれた。2年生のスワヒリ語の授業をみさせていただいた。勉強が得意な子、ゆっくりな</p>

		<p>ペースの子、忘れ物をして怒られている子。自分のクラスの子を見ているようでほほえましかった。遠いアフリカでも、子どもたちは同じように純粹でかわいらしいと思った。ただ、教室環境や文房具は、勉強に十分適しているとは言えない。自分の宿泊しているホテルは、電気も水も困ることはないが、小学校には、電気も水道もない。そのことに違和感を覚えた。小学校アンケートとして、「私の幸せ」をテーマに画用紙に書いてもらった。絵を描きなれていない子が多いように感じたが、みんな一生懸命に書いてくれた。子どもたちが歌ってくれた校歌は、自然と体が動き出すようなリズムカルなもので、掛け声や振り付けもあり、感動的な忘れられない場面となった。</p>
8月13日(木)	警察学校 江波戸隊員活動視察	<p>警察学校の校長にお会いすることができた。学校内の敷地はとても広く、ドミトリーの建物もたくさんあった。警察犬の小屋など、日本でも見たことがないものを視察することができた。江波戸隊員が、校長や選手から信頼されている様子が伝わり、現地の人と心を通わせながら仕事をされている隊員を、同じ日本人として誇らしかった。柔道の練習も見せていただいた。日本で生まれたスポーツが、こうしてタンザニアの方にも親しまれているのはすごいことだと思った。十分な数の畳がなく、練習がしづらいという現状を目の当たりにした。</p>
8月13日(木)	本日のふりかえり	<p>「物」の大切さについて考えた。生活する上で大切なことは、物だけではない。しかし、物が無いとできないこともある。例えば、学校においては、もっと教材や教具があれば、子どもたちの思考が深まるだろう。柔道の練習場に、畳があれば、十分な練習を積めるだろう。「物をあげるだけの支援はよくない」ということは分かっているが、実際に現場を見ると気持ちが変わってくる。目の前にいる人々の「今」をどうにかしたいという思いが出てくる。</p>
8月14日(木)	タンライスプロジェクト 視察	<p>専門家の大泉さんから「タンライス」についての概要が説明された。米の生産量を上げる上で、大きな壁となっているのが、過酷な環境と質の低い灌漑施設、脆弱な管理体制である。このような課題に対し、一つ一つ丁寧にプロジェクトを立てながら、タンザニアの米作りの発展に貢献する役割は大きいと思う。農家の意識を変えるために研</p>

		<p>修会を開催するなど、地道な努力が少しずつ実を結んできているのだと感じた。</p> <p>どこまでも広がる田んぼの所々に、バオバブの木が見える。これは、アフリカでしか見られない光景ではないだろうか。</p> <p>タンザニアの稲作農家にとって、水は大変貴重である。上流に住む農家が水を多く使うと、下流に住む農家まで水がいきわたらないという。一見、「上流に住む農家」はひどい、「下流に住む」農家がかわいそうと思ってしまう。しかし、上流に住む農家の言い分を聞くと、「上流は米しか育てることができない。下流に住む人は、畑を広げ、別の作物を作って生活することができる。」という。ここから見えてくるものは、それぞれの立場の意見をしっかりととらえることの大切さ、これに尽きると思う。</p>
8月14日(木)	専門家との懇親会	<p>大泉さんのご家族とインド料理系のレストランへ。途中で何度も停電で真っ暗になった。初めは驚いたものの、あまりに連続で停電になるので、途中からすっかり慣れていた。仕事をする上での喜びや苦労なども聞くことができ、勉強になった。</p>
8月14日(木)	本日のふりかえり	<p>大泉さんが、「農家にホームステイした知り合いが、その家族と同じ食べ物を食べ、同じ様子で生活していた。同じ量の労働をしてみると、全然力が湧いてこない。彼らの生活スタイルで農作業をすることが、どんなに大変かを身に染みて感じた。」という話をした。また、専門家の方から、タンザニアという国の秘めた可能性の話を聞き、今後のタンザニアの経済や文化の発展がとても楽しみだと思った。</p>
8月15日(木)	タンライスプロジェクト 農村視察	<p>農村に住む家族と過ごした時間は、かけがえないものとなった。出会ったのは、父・母・息子2人の笑顔がすてきな4人家族だった。チャイで温かいおもてなしを受けたあとは、田んぼを見学にいたり、一緒に料理を作ったりした。かまどで火をおこし、丁寧に調理をしていく。人と自然が共存しながら生活している印象を受けた。一方、女性が主に家事をする文化は、ジェンダーの問題について考えさせられた。電気や水が十分でない中での家事は、想像以上に重労働だ。テーブルを囲んで食べた料理はとてもおいしく、心温まる味がした。</p>
8月15日(木)	市内視察	<p>マーケット布や野菜、スパイスなどのお店が、</p>

		所せましに並んでいた。カラフルで活気があり、通るだけで元気になるようだった。メンバーの中には、お米やうがり用のへらを購入しているひとがいた。日本に帰ってから、試してみると言っていた。タンザニアの人は、あまりカメラを向けられるのが好きではないという情報もあり、限られた台数だけで撮るようにした。
8月15日(木)	本日のふりかえり	<p>印象的だった農村体験について話した。まずは、何よりも、現地の方の生活を近くで見たり、体験できたことが嬉しかった。日本とタンザニア、距離は遠いが、一緒に笑い合ったり、料理に集中したりするなど、同じ気持ちを共有することができた。このふれあいから生まれる嬉しい気持ちを、子どもたちにつたえていきたいと思った。</p> <p>また、「便利さ」と「豊かさ」の関係について考えたとき、</p>
8月16日(金)	ダルエスサラームへ移動	朝、空は澄み渡り、めったに見られないといわれていたキリマンジャロが朝日に照らされてくっきり見えた。とても感動した。その素晴らしい景色を眺めながら、皆でラジオ体操をした。飛行時間はそんなに長くなかったが、研修の半ばを過ぎて、メンバーの中にも少し疲れが見えてきたようだった。この日は、特に活動を入れていなかったもので、ゆったり過ごした。
8月16日(日)	専門家との懇親会	ダルエスサラームの港が一望できる、タイ料理のレストランへ。専門家の方たちとは席が離れていたため、あまりお話ができなかった。
8月16日(日)	本日のふりかえり	日直だったので、振り返りの流れを田中さんと考えて決めた。昨日のタンライスのふりかえりの続きと、教材研究について校種別で集まって話し合った。実際に子どもと関わって
8月17日(月)	タンザニア電力供給公社(TANESCO)プロジェクトサイト視察	図面を見ながら、電力の供給の仕組みをととてもわかりやすく説明していただいた。建設中の建物もあり、これからさらに電力の供給が増えていくことが考えられる。町の電力供給の要となっている重要な施設を見学することを通して、電力と人々の生活の関係について考えることができた。また、日本人の社員や専門家も、何人かここで働いていると知り、おどろいた。
8月17日(月)	市内視察・教材購入	障害者の福祉雇用を積極的に行っているという土産屋に入った。革製品をはじめ、すてきな土産品が数多くあって迷ったが、Tシャツとカンガを購入した。教材は、モシでスワヒリ語の教科書を

		すでに購入していたため、今回は買わなかった。
8月17日(月)	本日の振り返り	
8月18日(火)	ムランディジ小学校 三隅隊員活動視察	<p>事前に連絡を取り、プログラムを相談していた三隅隊員の勤務する学校である。2クラス合同での授業や、宗教の時間など、日本のカリキュラムとは異なる点も多い。</p> <p>特別支援教室を見学させていただいた。知的障害クラスと聴覚障害のクラスがあった。教員の数や教具の確保は、喫緊の課題であると感じた。特別支援教育について興味があったので、大変よい研修になった。元気いっぱいの子どもたちをみて、日本にいるクラスの子どもたちに会いたくなった。</p>
8月18日(火)	市内視察・教材購入	民芸品のコーナーでは、動物の木彫りや、アクセサリーなど、お土産品がたくさんあって、見て回るだけでもとても面白かった。
8月18日(火)	JICA 所員との懇親会	この研修で学んできたことを、お話することができた。所員の方は、気さくな方ばかりで、会話も弾んだ。
8月18日(火)	本日のふりかえり	特別支援教室を見ての感想を言っていたメンバーが多かった。子どもたちの教育の充実に向けて、環境を整えていく必要がある。予算の問題もあるが、もっと現場の子どもたちのために、予算を使ってもよいのではないかという考えもあった。
8月19日(水)	JICA タンザニア事務所 報告会および記者発表会	日本から来た私たちを、取材しにきてくださった現地メディアの方に感謝したい。英語を話せる教員を中心に、インタビューに答えていた。日本とタンザニアの教育システムの違いや、さらによりよい教育活動をしていく上での提案などが話題となった。
8月19日(水)	在タンザニア日本大使館 表敬訪問	大使は、一人ひとりの話を丁寧に聞いてくださった。タンザニアの国内が抱える課題や、これからの期待についてお話をいただいた。その中で、「日本企業のアプローチ」の仕方が、他国とは異なっている部分があることを知った。その国にとって何がベストかを考えた長期的アプローチをすることによって、それが結果的に日本にとっても良い影響があるという考え方である。さらに、「幸せ」についての話題になったとき、「心のもち方」が大事であるということを知った。これは、それぞれの国の「豊かさ」を考えていく上で、ヒントになりそうだった。

8月19日(水) -20日(木)	タンザニアから日本までの 移動中および日本到着	10日間の研修を終え、頭の中はそれぞれのプログラムでの充実した経験でぐるぐるしていた。タンザニアに行ってよかったという気持ちと、さあ、この学びを子どもたちにどう伝えていこうかという気持ちが、混ざり合って眠れなかった。田中さん、市川さん、足立さんをはじめ、この研修の計画と運営に携わってきたすべての方へ、感謝の意を表したい。そして、メンバーの皆さんとは、これからも情報を共有し、お互い高め合える関係になりたいと思った。
---------------------	----------------------------	--